

# グローバル人材の育成を図るための英語教育プログラムの開発・実践

～高知南チーム～

高知県教育センター 学校支援部 研究開発・グローバル教育担当

## 1 研究目的

社会や経済の急速なグローバル化に伴い、高度な英語運用能力とともに、論理的思考力や課題解決能力、コミュニケーション能力等を備えた人材育成が必要とされている。そして、「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画（文部科学省、2013）」、「高知県英語教育推進のためのガイドライン（高知県教育委員会、2015）」においても、英語によるコミュニケーション能力を確実に養うことが求められているところである。そこで、郷土を愛し、その発展に貢献できる人材や高い志をもち高知から世界へチャレンジできるグローバル人材の育成を図るため、英語教育プログラムを開発・実践し、その成果を高知県内の県立高等学校及び公立中学校に普及するためにこの研究を行う。

## 2 研究体制及び研究方法

本研究は、高知県教育センターと研究協力校である高知県立高知南中学校・高等学校（以下、「高知南中高」という。）が平成26年度に作成した「6年間のイメージ」、「6年間のシラバス」に沿って、平成27年度中学校1年生からスタートさせた。そして、高知南中高に常駐の教育センター指導主事とその他の教育センター指導主事とが連携・協働し、研究協力校を指導・助言することとした。

研究協力校では、グローバル教育校内委員会、英語教育推進チーム会を設置し、進捗状況を確認しながら研究を推進した。「高知南チーム」として取り組めるよう、教科会を実践内容やその結果を共有し次の方向性を確認する場として位置付け、PDCAが機能するようにした。また、その研究の成果を検証するため全生徒を対象に「英語学習への意識・実態把握調査」（以下、「意識調査」という。）を2回実施した。進捗状況については、高知県グローバル教育推進委員会（年4回開催）で報告し、グローバル教育推進委員からの助言を研究に生かした。

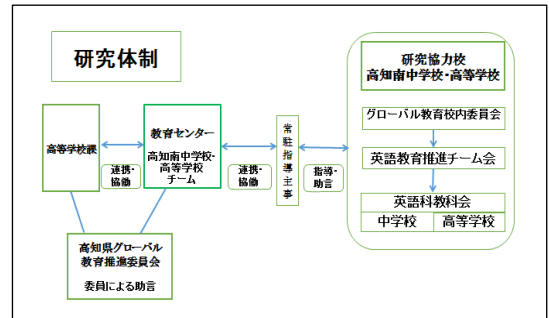


図1 研究体制

## 3 研究内容

### (1) 研究主題の設定

高知南中高英語科では、学校のグローバル教育目標「貢献的行動力をもった国際人の育成」を受け、生徒の現状等を明らかにしたうえで、中学校は「主体的に考え、積極的にコミュニケーションを図る生徒の育成」、高等学校は「自国の文化を理解し、国際的な視点で物事を考え、積極的にコミュニケーションを図る生徒の育成」を研究主題とし、授業を通して、その実現を目指すこととした。

### (2) 「6年間のシラバス」を活用した授業

#### ア 英語教育プログラムの概要

英語教育プログラムは、中高一貫教育校としての特色を生かし、6年間で系統的に英語力を身に付けさせるものである。その指導計画として、グローバル人材のイメージ、学年の目標、プロジェクト等を示した「6年間のイメージ」（図2）と、その具体



図2 「6年間のイメージ」

的な指導内容と到達目標等を一覧にした「6年間のシラバス」(表1)を平成26年度に作成した。平成27年度は、「6年間のシラバス」に学習指導要領の指導事項と研究主題に関わる視点を位置付け、生徒が「英語で～できた」と実感できる授業を目指した。そのために、生徒がより多く英語を使う授業構成、段階的な言語活動と学習意欲を高める活動の設定等に取り組んだ。

表1 「6年間のシラバス」 中学校1年生 (★は研究主題に基づいた視点)

中1		1学期前半	1学期後半	2学期前半	2学期後半	3学期
年間目標		○英語に触れる習慣を付けよう	○友達を発表をしっかりと聞こう	○自分の気持ちを英語で話そう	○音読をしっかりとできるようになろう	○正しく英語を書けるようになろう
学習内容	活動	●お手本をまねて話す(あいさつ、一般動詞)(小学校外国語活動との接続) ●7文程度で自己紹介をする。(小学校外国語活動との接続) ●アルファベットを覚える。	★好きなもの、持ち物、することなどについて質問したり答えたりする ★自己紹介をする	★第3者について質疑応答をする ★友達とインタビューをする	●暗唱で、できることなどを入れた第三者の紹介をする ●picture describingをする ★知りたい人について質疑応答をする	★1年の中で起こった出来事などについて、はがきや日記を書く ★高知県の観光地をALTに紹介し、簡単な質問に答える ●ある程度の長さの物語を読み、印象に残った一文とその理由をやりとりする
	副教材 ICT	リスニング・読み聞かせ・多読多聴・フォニックス・音読・ライティング				
	文法	●文字の書き方 ●be動詞を用いた文	●一般動詞を用いた文 ●whatを含む疑問文 ●可算名詞の複数形 ●how manyを含む疑問文	●命令文 ●三人称単数現在形 ●who, what + 名詞, which, where, whoseを含む疑問文 ●人称代名詞	●人称代名詞 ●現在進行形 ●否定命令文、be動詞の命令文	●一般動詞の過去形を用いた文 ●canを用いた文 ●whenを含む疑問文
	教科書	Unit1,2	Unit3,4,5	Unit5,6,7	Unit8,9,	Unit10,11 Let's Read
到達目標	リソング	Hi, friends! Lesson1,2	Lesson4,5,6,7,8	Lesson3,4,8	Lesson2,3,4,5	Lesson7
	L	●英語独特の音に注目して聞くことができる。 ●あいさつや身近な単語、自己紹介を理解することができる。	●質問の内容を理解することができる。	●質問の内容を理解することができる。	●質問の内容を理解することができる。	●質問に適切に応じることができる。
	S	●英語独特の音に注目してまねることができる。 ●外国語活動をベースに、あいさつや簡単な自己紹介ができる。	●基本的な一般動詞を用いて話すことができる。 ★自己紹介を考えて発表することができる。(聞き手に伝えたいことを考える)	●第3者について質問したり、質問に答えたりすることができる。 ●質問に答えることができる。 ★let'sや既習表現を用いて、相手を誘うことができる。	★疑問詞を用いて質問をしたり、質問に答えたりすることができる。 ★暗唱で第三者の紹介ができる。 ●現在進行形を使って状況を描写することができる。	●相づちを打ちながら、質問できる。 ●質問に的確に答えることができる。 ★お気に入りの人、物、場所をALTで紹介できる。 ●ある話題について友達とやりとりすることができる。
	R	●英語独特の音に注目して読むことができる。 ●英単語を読むことができる。	●英語独特の音に注目して読むことができる。 ●英単語を読むことができる。	●英語独特の音に注目して読むことができる。 ●英文を音読できる。	●標識等の指示が理解できる。 ●疑問詞、進行形、人称代名詞を含む文を理解できる。	●ある程度の長さの物語の概要をとらえながら読み取ることができる。 ●内容が表現されるように音読することができる。
	W	●アルファベット、英単語、文を手本通りに書くことができる。 ★既習の表現を用いて自己紹介文を書くことができる。	●TSVの語順に気を付けて、文章を書くことができる。	●「SV+いつ」の語順に気を付けて、文章を書くことができる。	●「SV+どこ+いつ」の語順に気を付けて、文章を書くことができる。 ●スピーチ原稿を書くことができる。	●語順に気を付けて、はがきや日記を書くことができる。 ★印象に残っていることについて手紙を書くことができる。
	パフォーマンステスト	●自己紹介文を書く。(W)	●自己紹介(S)	●誘うスキット(S) ●音読テスト(R)	●Show & Tell 他己紹介(S) ●スキット(S)	●キャラクター紹介文(S) ●音読テスト(R)
辞書指導	●文字指導と並行し、辞書に慣れる。 ●ゲームなどで慣れる。	●辞書の引き方、読み方を学ぶ。 ●ゲームなどで慣れる。	●複数の意味のうち適切なものを選ぶ。	●例文を参考にして書く。	●辞書を使って文章を作る。	
家庭学習	音読・音読筆写・Drill学習			【冬】校内英語スピーチコンテストの練習をする。	【春】中1の教科書本文を全て音読する。	
検定等	英語検定5級合格・高知県中学生英語弁論大会・高知県学力定着状況調査・校内英語スピーチコンテスト					

イ 授業実践事例(中学校1年生 11月 本時の目標:疑問詞を用いて人物について質疑応答する。)

(ア) 授業の概要

「みんなの知りたい人物について調べよう、質問しよう、答えよう。」というめあてを提示し、学級で話し合った「今、気になる人物」についてタブレット端末で調べ、その情報をもとに、質疑応答をさせた。調べた情報をメモし、それをどう英語で伝えるとよいかを考え、メモを見ながら話すことにより、研究主題の「主体的に考える力」を育てたいと考えた。また、「知りたいことを尋ねる。知っていることを伝える。」という意味のあるコミュニケーション活動を設定することにより、学習意欲を高めるとともに、積極的に英語でやり取りをする態度を培うことを目指した。

(イ) 成果と課題

授業アンケートでは「またやりたい。」「とても楽しかったし、疑問詞もちょっと覚えられたのでもう1回やりたい。」という肯定的な記述が多かった。そして、「分からないことは質問したり調べたりして解決しようとした。」「友人の意見や考えを聞き合い、学び合えた。」と回答した生徒はいずれも96.7%であり、主体的・協働的に学んだことがうかがえる。そして、「英語の授業の内容が分かった」と回答した生徒は93.3%であるものの、本時の目標である「疑問詞を用いて質問することができた」と回答した生徒は83.3%であった。「理解する」と「できる」の違いを教員が再確認するとともに、生徒全員が「英語で～できる」力を付けるために、学んだことを実際に活用する場を設定し、言語活動を通して学習内容の定着を図ることを継続する必要がある。

## ウ 授業実践交流会

英語担当教員全員が公開授業をし、その授業について「授業実践記録」(表2)をまとめ、教科会で実践交流会を行った。成果としては、単元及び本時の目標の共有、具体的なゴールイメージの提示、アウトプット活動のトピックの工夫、ICT(主にタブレット端末)の活用等による学習意欲の向上、ペアやグループ活動の効果的な設定による主体的・協働的な学びの工夫、授業の振り返りと改善策の構築等が挙げられた。課題としては、生徒が活動したり思考したりする時間の確保、教科書の題材と生徒を近づける発問の工夫、取組の分析を生かした具体的な実践等である。

表2 「授業実践記録」(中学校1年生)

単元名 (中心となる 言語活動)	単元目標	主体的に 考える	積極的に コミュニケーションを 図る	成果と課題(○成果 ●課題) 生徒の姿(この単元で生徒ができるようになったことや、次は目指したい姿や指導したいこと)、指導方法、アンケート等
Unit 8 ナンシー に会いに 「話す こと」 (ウ)	○単元のゴール 「疑問詞を用いて、ある人物について質疑応答ができる。」  ・疑問詞や代名詞を用いて、人物について質疑応答ができる。 ・積極的に友だちに話したり、質問に答えたりする。 ・疑問詞を用いた文の構造を理解する。 ・代名詞の用法を理解する。	・ある人物について、自分が知りたいことを英語で話す。どんなことを知りたいかを考え英語で話す。 ・タブレット端末を用いて調べた情報から必要なものを適切に選択して話す。	・知りたい情報について、疑問詞を用いて積極的に友だちに質問したり、答えたりする。	○疑問詞を用いて、聞きたい内容について質問することができた。 ○教科会でCAN-DOリストの具体的な活動としてどのようなものがよいかについて、指導主事や他教員と検討し、アイデアを出し合うことができ、英語科として研究していることの発表となった。 ○調べる人物については、教員側が想定をしていた人物と、生徒が調べたい人物がかなり違っていた。「とても楽しかった。疑問詞もちょっとおぼえられたので、もう1回やりたい。」「調べ学習、質問、答えが楽しくできた。」という生徒の感想もあり、生徒の要望を尊重したことで、より主体的に調べ学習ができた。そして、そのことが英語で友達とやりとりをするという積極的な態度につながったと考える。 ○振り返りシートに記述する英文(基本文)は、初期の正答率が30%程度であったが、単元の最後には80%に上昇した。授業でできるだけ使わせた後書かせるようにした結果だと思われる。 ●生徒授業アンケートでは、「授業の内容が分かった」生徒は93.3%であったが、本時の目標である「疑問詞を用いて質問することができた」生徒は83.3%であった(いずれも肯定的評価)。疑問詞を用いて質問し合う練習の場面で、その中で見取りをして、個別指導・全体指導をして、発表につながればよかった。 ●be動詞と一般動詞の区別がまだ十分理解できていない生徒がおり、聞きたい内容について適切に疑問詞を選択しているものの、文法が正確でないケースがあった。

## 4 英語学習への意識・実態把握調査

### (1) 調査対象者・調査時期

調査対象者は、中学校1年生から高等学校3年生である。調査時期は、平成27年8月(第1回)と平成28年1月～2月(第2回)である。

### (2) 調査の目的・内容

この調査は、研究主題について生徒がどのような意識をもち、英語の授業をどのように捉えているのかを把握するとともに、英語検定等の資格の取得状況を把握するために実施した。調査は、「研究主題の実現」、「入学前の英語学習」、「学校での英語学習」、「学校以外での英語学習」、「英語検定等の資格」、「その他」の6項目から構成した。

### (3) 調査結果

中学校1年生から高等学校3年生までの全学年の調査結果を述べ、次に研究対象である中学校1年生の調査結果を報告する。

#### ア 全学年調査結果

##### (ア) 研究主題に関する意識

第2回調査において「英語の授業では、課題に対して自分の考えをもっている」と回答した中学生74.8%、高校生64.4%、「日本の伝統や文化に興味や関心がある」と回答した中学生75.6%、高校生70.5%、「外国の伝統や文化に興味や関心がある」と回答した中校生71.6%、高校生66.8%であった。これは第1回調査結果とほぼ同じであり、学校全体として、自分の考えをもって英語の授業に臨むとともに、国内外の伝統や文化に対する興味が高い。

##### (イ) 英語が好きな生徒の割合(図3)

「9教科の中でどの教科が好きか」(複数回答)の結果、英語は第1回調査では9教科中5位、実技教科以外の中で1位であり、第2回調査ではそれぞれ5位と2位であった。全国調査であ

る「第1回中学校英語に関する基本調査（以下、「基本調査」という）」では、英語は9教科中8位であり、英語嫌が多いと報告されており、基本調査と比較すると英語が好きな生徒の割合が多い。

#### ウ) 英語の授業の理解度

「英語の授業をどれくらい理解していますか（70%以上理解している）」の結果は、第1回調査では中学生 51.9%、高校生 31.4%、第2回調査では中学生 59.0%、高校生 39.4%であった。また、「英語の授業では、先生の説明を聞いている時間と、自分が英語を使っている時間ではどちらが長いですか」について、

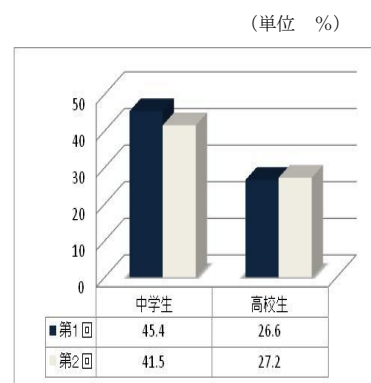


図3 英語が好きと回答した生徒の割合

第1回調査では中学生 39.7%、高校生 27.2%、第2回調査では中学生 50.7%、高校生 27.4%が「自分が使っている時間の方が長い」と回答した。授業者を対象とした英語教育実施状況調査においても「授業中半分以上の時間、言語活動を行っている（50%程度以上）」と回答した教員は平成26年度と平成27年度を比較すると75.0%から81.6%と増加しており、生徒が受け身がちな授業から、生徒同士の対話や、思考・表現活動を取り入れた授業へと転換していることが分かる。

#### イ) 中学校1年生調査結果

今回の研究目的は、中学1年生からの英語教育プログラムを構築し、生徒の思考力や英語力を向上させることである。第1回調査と比較すると、第2回調査においてほとんどの項目において肯定的回答が得られた。表3は、研究主題と英語の授業に関する項目からの抜粋である。これらの項目においても、2回目の数値が上昇していることが分かる。また、授業で英語を聞く・話す・読む・書くという4技能の活動が好きであるという生徒も増えている。さらに、英語を学習している理由として、「英語を勉強すると視野が広がる」、「英語の番組や映画を英語で理解したい」と回答した生徒もそれぞれ69.9%から78.9%、48.9%から55.1%と増えており、英語教育プログラムを実施することで、生徒が英語を使う時間の増加、言語活動の内容の工夫により、授業の質が向上したのではないかと考える。

表3 中学校1年生の研究主題・英語学習への意識の変容（一部抜粋）

(単位 %)

質問項目	第1回調査	第2回調査	差
日本の伝統、言語や文化に興味や関心がある	75.9	79.8	3.9
英語の授業では、積極的に英語を使っている	80.4	83.3	2.9
英語の授業をどれくらい理解していますか。(70%以上)	65.5	61.4	6.2
英語の授業では、自分(生徒)が英語を使っている方が長い	40.4	53.7	13.3
英語の授業は楽しい	61.9	67.0	5.8
友達と英語で話すことが好き	51.3	60.1	8.8

(\*差は第1回調査と第2回調査の数値の変化)

## 5 本研究の成果と今後の取組

高知南中高英語科では、英語教育プログラムの開発・実践において、生徒の現状を把握したうえで、学習指導要領と研究主題の視点を踏まえ、授業改善に取り組んできた。教員一人一人に任せがちな授業を、高知南チームとして、ねらいに応じた言語活動を効果的に設定し、生徒の表現活動を多くするという共通の学習過程を取り入れたことで、生徒の英語学習への意識を高めることができた。

平成28年度は、評価方法について研究する。「英語で～できる」という力を身に付けさせるためには、指導内容をパフォーマンステスト等適切な方法で評価することが必要である。そして、その評価や評価過程において、生徒自身が、自分のよさや課題を知り、友達のよさに気づき、共に学びを深めていく英語の授業を作っていきたい。